

まえがき

石井米雄先生を偲ぶ

高山 正也

国立公文書館長

アジア歴史資料センター（以下アジ歴という）の創立以来センター長をお願いしていた石井先生の訃報が届いたのは2月12日の夜であった。

昨年末にもご入院との知らせがあり、心配していたが、新年には元気で、いつもの穏やかな笑顔で会議にご出席いただき、安心していた矢先のことであった。石井先生との出会いは、筆者が国立公文書館理事になって以来ことであった。不慣れな環境に戸惑いがちな私に、大学人としての先輩という感じでいつも心が癒される接し方をしていただいた。そのようなお人柄は単に筆者に対してだけでなく、アジ歴に集う後進の研究者を含め多くの人にも向けられていた。先生の学識と人間性は新学問分野を自ら現地に飛び込んでの資料類の収集や、実証的な厳しい学習や研究の結果、到達し得た人格の現れであったと考えている。それ故に、先生は多くの人、特に後進の研究者たちにも慕われた。しかしその石井先生は単にタイを始め、東南アジア地域研究の碩学であるだけにとどまらず、組織運営にも優れた能力を発揮され、アジ歴の運営においてもそのお力をいただいた。

アジ歴はご承知のように1994年の総理大臣談話とその後の閣議決定で、創設が決まったものの、種々の曲折があり、発足までには7年もの歳月を要するという難しい組織である。そのリーダーとして、時には現場や裏方に目配りをし、関係者の努力を結集し、海外にまで理解を広め、最先端のIT技術を駆使し、世界最大規模のデジタルアーカイブズシステムを創ることで、アジ歴が直面していた諸課題を解決するという手腕をも発揮された。こうして今ではアジ歴デジタル・アーカイブズは単に日本研究のみならず、東アジア研究にとって不可欠な、日本が世界に誇りうる文化・学術インフラの一つにまで成長している。

石井先生からは多くの事を学ばせていただいた。中でも歴史の見方の基本を教わったと思っている。石井先生がよく語られたエピソードに、終戦直後の数寄屋橋で進駐軍の兵士にすれ違いざまに顔面を殴打されたという話がある。このエピソードを通じて石井先生から、「殴られた側と殴った側では歴史認識の共有などはできるはずがない。共有できるのは日本の一人の若者が米兵に殴られたという事実だけだ。」と教えられた。

殴られた側はその痛みと屈辱は忘れないが、殴った側にも、殴らざるを得なかった理由があるかもしれない。だが、そのことは決して殴られた側には伝わらず、誰が誰を殴ったという事実が残るだけということである。

アジ歴がデジタル・アーカイブズを通じて日本政府の所蔵するアジア近隣諸国との歴史資料を全て公開するという形は、石井先生のその考えや信念を具現化した一例でもあろう。

先生のこのお考えを念頭にアジ歴の一層の発展をご霊前にお誓いするとともに、アジ歴をここまで育てていただいたご苦労に感謝し、ご冥福を祈ります。合掌。